7TH DRAGON 2020　ANOTHER DAYS

霊宮空刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
７ＴＨ　ＤＲＡＧＯＮ　２０２０　ＡＮＯＴＨＥＲ　ＤＡＹＳ

【Ｎコード】
Ｎ０４００Ｚ

【作者名】
霊宮空刀

【あらすじ】
朝霧空也と暁美ほむら、二人の物語が今、始まる／鹿目まどかと空刀聖夜とその仲間は、水面下で動く・・・

初めに

注意！！

この作品には『主人公チート。しかし度合いがとてつもない』と『登場人物少なすぎる』と『設定を借りているだけ』の三つがあります！なお、主人公チートは魔物、ドラゴン、帝竜などと戦う為のチートです。それでも人類最強なのですが。

チートの度合い　クウガタイタン＋クウガドラゴン＋クウガアルティメットのいいところを全部足した感じです。

登場人物の少なさは、作中で人類を主人公以外・・・・・・・・の予定なので少ないのです。

設定を借りているだけは、そもそもムラクモ機関がでず、ＳＫＹなどの組織もでません。そこを注意して読んでください。

それでは、どうぞ

FIRST　DAYS（前書き）

第一章ＯＰ「雷鳴アンプリファ」

空也戦闘時ＢＧＭ「烈風の証～ｗｉｎｄ　ａｎｄ　ｂｌａｚｅ」

FIRST　DAYS

「面白くね～な」

そうつぶやいたのは、主人公でもある朝霧空也。空也は屋上で寝そべりながら空を見上げていた。しかし、彼の視界に不自然なものが映った。

「な、何だよこれ・・・？」

空也の手にはセブンスドラゴン２０２０本編でサムライが手に入れることのできる武器、千鳥が握られていた。それを一回引き抜くと、空也が地面に膝をつく

「な、なんだよこれ・・・・何かが・・・・流れ込んで・・・・ぐぅ・・・」

瞬間、空也はぶっ倒れた。しかしすぐに起き上がると千鳥を鞘にしまい、服のベルトに挟み込んだ。だがすぐに空也は両手で頭を押さえこみその場にうずくまる

「はい・・・って・・・くる・・・なぁ！！！！！」

そう叫ぶと頭を一気に振って何かを取るように動く。そして空也はその場に座り込むと息を荒げながら空を見上げる。その真上を何百匹もの竜が通り過ぎて行った。竜が通り過ぎた後には赤い花が大量に咲き乱れ、空也の周りを包み込む。さらに竜は街を襲撃し、次々に人間を惨殺していった。

「何なんだよ！？日本刀が落ちてきて乗っ取られかけて、挙句の果てには日本滅亡か！？夢だと信じたいぜ！」

空也は1秒で屋上から降りる階段へ走り込むと、わずかな時間でグラウンドまでついていた。その時に彼が見た光景は凄惨な者だった。人の死体は食いちぎられて、身体の臓器が露出し、首から上がない死体もあった。普通の完成なら嘔吐する者もいる。それと同じように空也は

「う・・おぇぇぇ！！！！」

その場で嘔吐し、千鳥を杖にしながらふらふらと立っていた。その間にも学校の生徒は喰い殺されていて、空也一人では何もできない状況になっていた。空也は無言でその場から駆け出すと、走りながらこう考える

「（夢で・・・夢であってくれ！！！こんな悪夢・・・・こりごりだ！！！）」

そう考えながら走り、自分の家へと飛び込む。

「うぅ・・・夢・・・だよな、夢、だよ・・・なぁ・・・・・」

自分を殴ったりつねったりしながら空也は夢であることにしようとしたが、悲しくもそれは現実だった。空也はそれを確認しながら、千鳥を握りしめ、また置くとこう言った

「・・・・・・仕方ない・・・これが現実なら・・・受け入れるしか・・・・ない」

そう言って汚れた服を脱ぎ捨て、水色の服を着、ズボンをはき、フードをかぶるとこうつぶやいた。それはこれからの戦いの始まりを示す合図でもあり、同時に空也の終らない戦いを始める言葉でもあった

「竜を、狩りつくしてやる！！！！」

そう言って千鳥を抜刀すると、トンボ斬りという技で家の壁をふっ飛ばし、そして近くに居たタワードラグの上に飛び降りると、タワードラグの頭を突き刺して絶命させる。それをみたドラグライアーンが風切羽で攻撃してくるが空也はそれをよけるとドラグライアーンに袈裟切りを行い、ドラグライアーンを一刀両断する

「（何だ・・・・まるで歴戦の兵士の戦い方が染みついている？）」

そう考えて少し隙が出来ると、デストロイドラグの拳が空也の体に入った

「ぐはぁ！！」

空也は吹っ飛ばされて、身体がぐちゃぐちゃになってつぶれるかと思いきや、飛ばされた先の電柱に足をつけると、衝撃を利用してデストロイドラグまで迫りながら刀を居合の形にし、フブキ討ちと言う技を使用してデストロイドラグを凍りつかせる。さらに抜刀して斬り、デストロイドラグを真っ二つにする

「（俺・・・こんなに身体が強靭か？それに変な技まで使いこなしているし・・・・）」

空也は変わった自分に疑問を抱きつつも、その場にいた残りの竜・・

・リトルドラグ3体を軽く切り刻むと、千鳥を鞘に収めながら歩き始める。その道には、何が待っているのかは定かではない。そして、それを見ている一人の少女がいた

「・・・・・・・・」

ドレスを着ていて、緑色の髪にツインテールの少女が、空也の走りさって言った先を見、また自分も空也を追いかけるようにして走って行った。そのあとにはドラゴンが2体ほど来ていてあの少女を探しているようにも見えた

FIRST　DAYS（後書き）

登場ドラゴン

タワードラグ
足が異常に長いドラゴン。毒系の技を使う
ドラグライアーン
飛行する至って小さいドラゴン。だがつんざく羽音などで混乱させ、混乱している隙に相手を攻撃するドラゴン
リトルドラグ
まだまだ小さいドラゴン。他のドラゴンと違いそれほど強くはないデストロイドラグ
大きく、強そうなドラゴンで人型に近い、拳にメリケンサックのようなものをはめており、その拳から放たれるパンチは常人なら即死する。また、ジャンプキックも相当の強さを誇る

登場武器
千鳥
サムライが使える武器で、物語の都庁改修でとある条件をクリアすると手に入る武器

修正＆増量

朝霧空也　～ＡＳＡＧＩＲＩ　ＫＵＵＹＡ～

名前：朝霧空也

性別：男

年齢：１７

容姿：公式サイトのサイキック男

性格：千鳥から流れたものではあるものの戦闘では冷静な事を考えることが可能で、激高することもあまりない。良く言えば他人への執着があまりない（ほむら抜く）悪く言えば拒絶（ほむら抜く）。くどいようだがほむら抜く

武器：サムライ専用武器『千鳥』→千鳥が進化した『稲光』

説明：剣道をやっていたが、中学のころから荒れた生活を送っていた。剣道をやっていたため日本刀の使いはうまい。自分の生活がとても面白くなくなり、刺激を求めて喧嘩を始め、中学２年の頃には誰かれ構わずに喧嘩をふっかけるようになったため「強暴王」と呼ばれていた。しかし、成績がとても優秀なため、学校側も退学に出来ない

空也の家族構成

朝霧斬忌

空也の父親であり、剣道では有名な選手。空也にも剣道を教えたが、

荒れた生活を始めたため、代りに妹に剣術を教えた

朝霧来夏

空也の母親。

朝霧楓夏

空也の妹。空也曰く「つまらない妹」らしい。性格は真面目であり、剣道も空也以上に強い。本編開始までに唯一空也に一番近かった人物。ネタバレになるようだが彼女も空也と同じ力の持ち主であり、日本で生きている

朝霧空也　～ＡＳＡＧＩＲＩ　ＫＵＵＹＡ～（後書き）

1月2日　説明を大きく変更

FIRST DAYS 2

空也はドラゴンとの戦闘での疲労を回復するために廃墟となったネットカフェに居た。そこでまだ仕えそうなパソコンで情報を収集しようとすると、いくつかのことが分かった。

「一つ目は、日本、アメリカ、中国にしか侵攻していないことか・・・」

ドラゴンはどうやら日本とアメリカと中国にしか侵攻していないらしく、共通点も何もないのでほかの国は混乱しているらしい。特に襲われた国の近くにある国の中には、攻め入ろうとしている国もあるらしく気が抜けない状態らしい。

「二つ目にドラゴンは無意味に人を殺すってことだけか」

空也は生存本能だと片付けると、次のサイトへとジャンプする。そこには面白い情報が載っていた

「なになに・・・はぁ？『狩る者』？なんだそりゃ」

面白そうだが関係ないと空也は斬り捨て、パソコンの電源を切る。

「日本で生き残っている人間はいないに等しいと考えてもいいころ合いかな・・・？」

日本は国土が狭いため、移動速度の速いドラゴンが大量にいればすぐに北海道や沖縄まで侵攻し、人を殺しているに違いないと空也は考え、今は国外にわたることを検討している

「でもなぁ・・・ジェット機の運転・・・・・・できるわ」

どうやら記憶の中にはジェット機やヘリコプターなどの運転方法もあったらしく、空也は近くの『羽山空港』へ行くことを決意し、ネットカフェを出た。その途中に、壊れていないバイクを発見した

「う～ん・・・・燃料も満タンだし・・・足に使わせて貰うか」

そう言ってエンジンをふかすと、その場からフルスピードで走り出す。しばらく走っていると目の前にいろいろな異形がいた

「ちぃ・・・やっぱりドラゴンっぽい魔物がいるな・・・あれ？魔物？なんで名前知ってるんだ。まあいいや」

そして空也は千鳥を引き抜くと、魔物がいる場所の横すれすれをすれ違いざまに何回も切り裂き、その場から走り去る。そして、羽山空港に着くと、そこはもはや空港の原型をとどめていなかった。そう、空港の滑走路には飛行機が何個もくっつきながら上をのぼり、それを空港内からでたエスカレーターが繋がり、空港内につながっているという最悪な状態であった

「うわぉ・・・とりあえずあの飛行機橋から行きますか」

そう言ってバイクに乗り、一番下の飛行機にバイクごとジャンプして乗っかると、そこから上まで一気に走りだした。しかし、途中に大砲が何個も設置されていた

「なんd・・・うわ！！！！あぶねぇな・・・・」

間一髪、バイクからジャンプして飛行機の上に着地することでそれをよけると、バイクは大砲から放たれた電磁砲により破壊された。

「これをどうやって突破するか・・なぁ・・・」

FIRST DAYS 2（後書き）

注意、これはジゴワットダンジョンを元にしております

FIRST　DAYS　3（前書き）

帝竜はとある七つの国に1匹ずついます

日本・・・・ジゴワットみたいに

ちなみに他の飛行機のような上に行く橋の周りには磁力で浮いている鉄のパネル？があってその上に電磁砲があります

FIRST DAYS 3

「どうすっかな。動いても電磁砲に撃たれるしこのままでも撃たれるし・・・あ、そうだ」

空也はそういって千鳥を構えると、トンボ斬りを近い電磁砲に一つ放つと、電磁砲が爆発した。と同時に残りの５つの電磁砲が一斉に空也を向く。そして空也が上空に飛ぶと同時に一斉に電磁砲が発射され、立っていたところの飛行機が爆発し、繋がっている飛行機が次々と爆発していった

「速くいかないと足場が！！なくなる！！！」

そう言いながらも残っている飛行機を足場にして飛びながら、急いで空港内へと急ぐが、その前に足場である飛行機がすべて爆発し、まっさかさまに空也は落ちていく。が、電磁砲を足場にして何とか空港内へと入り込む。

「うぇい・・・・・こんなに魔物が多いのかよ・・・・」

入り込んだ空也の目の前には熊型の魔物や鹿型の魔物、スライム系魔物など多数いた。

「だったら・・・・・」

空也は千鳥を鞘にしまうと、一気に走り抜きながら見えない速度で抜刀しまた鞘にしまう。それを何回も繰り返しながら魔物の群れを抜けた後、鞘と刀でカチリ、と音を鳴らす。そうすると魔物の群れ

がぐらり、と傾き、真っ二つに斬り落とされる

「・・・・・崩し払い」

そして空也は空港の屋上へ行くために、二階まで一跳びで行くと、さらにそこから一跳びで三階まで行くと、そこからトンボ斬りで屋根をふっ飛ばし、そこから屋上へと行く。

「ん？あれは・・・・・・そうか・・なるほど、ねぇ」

そして空也は千鳥を抜刀して、目の前の・・・・・帝竜『ジゴワット』に千鳥の切っ先を向ける。

「少しお痛がすぎたんじゃねえのか？」

そう言ってジゴワットに突進し、上から袈裟切りに切り裂こうとするが、その前にジゴワットの肩にある電磁砲が空也を狙い、発射されるが、発射された電磁砲を切り裂き、ジゴワットへ一刀両断する。が、そこは帝竜、普通のドラゴンとは格が違い、少し傷がつく程度だった。その傷からは血がにじみ出ているのだが

「うわ・・・硬いな・・・・ここは」

ジゴワットの電磁砲から避けている間に鞘にしまい、電磁砲をよけながらジゴワットに近づくとフブキ討ちで斬る。斬ったところは凍傷になる

「Ｇｗａａａａａａ！！！！」

ジゴワットは叫びながら電気をチャージする。それを見た空也は「

まずい」とジゴワットから離れながら千鳥を抜刀し、後退する。と同時にジゴワットから超電磁砲が放たれ、当たったところはほとんど焼け落ちた。間一髪空也はそれを避けていたが、千鳥が多少融けかけていた。

「おいおいおい！！！！これじゃあ・・・・斬れないぞ」

空也はそう言いながらも千鳥でジゴワットに近づくと、一気にジゴワットの柔らかい所に突き刺し、引き抜く。

「ＧＹａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ！！！！！」

ジゴワットはそう吠え声をあげながら横に倒れ、倒れる前に空也はジゴワットの周りから退避する。そして、ジゴワットの死体は煌めきながら一つの刀へとなった。それは一振りの日本刀で、持ち手は黄色く稲光のように、刀身は何一つ傷も付いていない綺麗な銀色で、鞘は稲妻のような模様が走っていた。

「こいつは・・・千鳥もないし、千鳥が進化したのかな・・・・まあいいさ、こいつは『稲光』だ」

さらに空也はジゴワットの死体に近づき

「ふ、お前も強かったな・・・とりあえず、墓くらいはたてといてやる」

空也は拾ったナイフをジゴワットの死体の真ん中に突き刺すと、その場から歩き去り、ジェット機を見つけると乗り込む。そして、あいている滑走路を走りながら次の地

「ドイツへ行くぞ」

ドイツへと向かった。

FIRST DAYS 3（後書き）

帝竜戦・・・・酷過ぎる。あっけない意味でも。そしてジゴワットから出る刀は・・・・オリジナルです。

SECOND DAYS（前書き）

第二章ＯＰ「狂愛～ｋｙｏａｉ」

空也戦闘時ＢＧＭ「烈風の絆　ｗｉｎｄ　ａｎｄ　ｂｌａｚｅ」

今回はあのドレスの少女がすこし絡む・・・かな？

SECOND DAYS

「あららら・・・・酷いなぁ」

空也がジェット機から飛び降りると、そこにはとても凄惨な光景だった。人が包丁や棒などを持って殺しあいをしていた。しかも、街全体が樹海のようになっているので恐らく帝竜の仕業だと思われる。

「おっと」

「死ねぇぇ!!!」

そう空也が推測していると、突如一人の男が空也めがけて包丁を振り下ろすが、それを空也は避けて男の持っていた包丁をたたき落とす。男はさらに空也へめちゃくちゃに突っ込んでくるが、空也はそれを避けて男の鳩尾に一撃、痛みで気絶させる。

「こうしたほうが安全・・・じゃないか」

気絶した男は別の・・・おそらく少女と思われるが顔に血がべっとりついて判別が出来ない人間に刺し殺されていた。その人間は空也に向き直り、ばねのようにジャンプしてきた。

「うわお!!おいおい・・・・ここに居たら俺まで殺される・・・ま、いいか」

飛んできた人間の背骨を的確に折りながら空也はそう言った。さらに飛びかかってくる男を拾った包丁で串刺しにし、別の人間に男の

死体を投げつける。それを棒でたたき落としながら別の人間は空也に飛びかかるがそれを後にジャンプしながら回転することで避けると、包丁を投げつけて殺す。そうしながら空也は街の大通りから一旦離れると、裏路地で一息ついた

「ふぅ・・・一体どんな帝竜なんだよ・・・・？なんで俺、あのジゴワットとかいう竜が帝竜で、ここがこんなになったことが帝竜の仕業だってわかるんだろうな・・？躊躇なく人を殺していたし・・・・・」

その時、空也は人の気配を感じて身構えると、そこにはドレスを着たかわいい少女がいた。

「お前・・・帝竜の影響を受けていないのは何故だ？」

警戒を緩めずに空也は稲光に手をかけると、その手が動かなくなった

「！？なんだこれ！？手前か！！」

「そうだけど・・・そんなに警戒しなくてもいいと思うけど・・・」

空也は動かない手をそのままにしながら少女に問いかける。少女は動かない手の事を自分でやったというと、そのまま空也に一歩近づいた

「・・・・・・ま、信じてみるか」

「ありがとう」

そう言って空也は警戒を解くと、少女は少し緊張していたのか顔が

少し緩んでいる。それを少女はあわてて直すと

「とりあえず・・・・貴方はここに居る帝竜を倒さなくちゃいけないの。いえ、貴方はこの世界にいるドラゴンをすべて倒さなきゃいけない・・・それが貴方・・・『狩る者』の使命だから」

「狩る者？なんなんだよそれ」

「狩る者って言うのは・・・この星の意思で選ばれた、S級の才能を持つ人間の事。ドラゴンを狩るために生まれた人だけど・・・・貴方は少し違うみたいだね・・・？」

少女が狩る者のことについて説明をすると、空也は頭上に？マークを浮かべると、少し考え込んだ。そして頭を上げると

「ま・・・・俺はこの武器の前の武器・・・千鳥っつう日本刀を手に入れたら強い力を手にしたって感じなんだよな・・・」

「やっぱり・・・貴方は星の意思みたいなものじゃなくて、なんかこう・・・分からないね」

「分からないことは分からないままでいい。今が今だしな・・・・とりあえず、俺はこれから帝竜をぶち殺しに行くが・・・お前はどうやってここに居て、無事なんだ？」

空也が当たり前のような疑問を持った。今目の前に居る少女は無防備だからである

「それは・・・私が少し特別だからだよ。それじゃあ・・・」

少女はそういうと、光に包まれて消えてしまった

「おい、まて・・・あ、行っちまったなぁ」

空也はそう言うと、人にばれないようにその場を後にした

SECOND DAYS 2（前書き）

人間との戦闘時ＢＧＭ「最終鬼畜妹フランドールＳ」

スリーピーホロウ戦、２話後ですが

SECOND DAYS 2

謎の少女と別れた空也は、少女と別れた場所からそう遠くない場所にて、多数の人間に囲まれていた。

「（推測だが・・・帝竜のりんぷんで操られているのか？だったらこの帝竜は厄介だな・・）」

空也はそう推測すると稲光を抜刀するが、それよりも速く周囲の人間が稲光を抑えて抜けないようにし、それ以外の人間が武器を持って空也に襲いかかろうとする

「鬱陶しいなぁ」

あいている手で空也はポケットにあるナイフを持つと、本来トリックスターが使える技「タランテラ」でもう片方の人間を、自分の腕ごと殺さないように気をつけながら吹き飛ばすと、稲光を抜刀して周りを一閃、人間を次々に切り裂いていく。

「オラ、よ！！」

さらに空也は地面を蹴って飛び上がり、空中からのトンボ斬りで地面を振動させ、砂埃を巻き起こさせると、さらに空也は空を蹴って砂埃が舞い上がっていないところまで行く

「さてと・・・今のうちに逃げよ」

そう言って空也はその場から離れた。空也が離れた後の人間たちは

再び殺しあいを始め、数分後には屍しか残っていなかった。

「帝竜・・・・みいつけた」

口元をゆがませながら空也はそう言った。空也が隠れているごみ箱の中から除く景色には、無防備に眠っている帝竜・・・・スリーピーホロウにゆっくり近づくと、その頭に稲光を突き刺そうとしたが、その瞬間、空也の視界が一瞬揺らぐ

「っく・・・・やべ・・・・」

そして、スリーピーホロウが起き上がると、羽をはばたかせながら桃色に近い色のりんぷんを巻き起らせ、

「GAAAAAAAAAAAA!!!!!」

吠え声を上げる。

「ぐ・・・がぁ・・・・・」

スリーピーホロウのりんぷんを吸い込んでしまった空也は、頭を抱えてその場に座り込んでしまう。その隙に「この場は危険だ」と本能的に察知したスリーピーホロウは空を飛んで逃げてしまった。

「ぐ・・ぎゃあああ・・・・」

奇声のようなものを上げながら空也はその場にぶっ倒れる。その瞬間、空也はとある光景を見た

『××！！こいつを使え！！』

『ありがとうございます××さん！！！行くぞ・・・超××！！』

ドラマの刑事が着るような服を着た女が、赤色でクワガタに似た戦士に鉄パイプを投げ渡し、クワガタに似た戦士は何かを叫びその身体を青色に変化させ、どこかへ向かって行く・・・そういう光景だった

SECOND DAYS 2（後書き）

×で隠したけど意味ない・・・・

SECOND DAYS 3

空也がその場に倒れてから数分・・・意識が少し回復した空也の周りには、中年で眼鏡をかけ、帽子を頭にかぶっていて、コートを羽織る男性がいた。その男性は、空也を見ながら何かぶつぶつ呟いていた

「おの・・・・・・き・・のせいでこ・・・に現れるはずのない・・・・・現れてしまった・・・・この・・・の・・・なら・・・・・を・・・・・・しれない」

そしてその男は歩き去り、あとは空也だけが残っていた。しばらくすると空也は起き上がり、周りを見回す

「なんなんだろうな・・・あのおっさん」

どうやらフラッシュバックした記憶は覚えていないようである。そして空也はあることに気付いた。すぐに気付けよｂｙ作者

「おい・・・帝竜いないぞ!?どうすっかな・・・」

空也は頭をかきながらしばしの間、思案すると、その場から少し走り、とある廃ビルに入り、屋上に行った。そこで空也は周りを見渡すと、何かを発見したのか建物の壁を、パルクールと呼ばれる技術でわたると、空也が何かを発見した場所・・・・ずばりまた寝ているスリーピーホロウを見つけると、その横で抜刀し、構える。

「奥義・・・・・」

そしてスリーピーホロウを一回すれ違いざまに切り裂き、方向転換し、刀の持ち方を変えてまた切り裂く。それを何回も繰り返し、スリーピーホロウにダメージを与える

「乱れ散々桜」

そして、宙返りをしてスリーピーホロウの頭に日本刀を突き刺す。。宙返りしながら日本刀を引き抜き、引き抜いたと同時にスリーピーホロウの頭から大量の血が吹き出る。

「ＨＹＡＡＡＡＡＡＡ！！！！」

スリーピーホロウは叫び声をあげ、その場から飛び去って行った。それを見た空也は

「は・・・ハハハ・・・これでいいか・・・そのうち死ぬだろう。結構深い所までつきさしたし。ま、糞みたいな死にざまを、おがみに行ってやりますか」

そう言うと空也は手近な建物の壁にひっつくと、そこからまたパルクールで、スリーピーホロウが飛んで行った方向へと急ぐ。

「ッハ！！！いい死にざまだぜ！！」

空也が見たのは、無様にも脳髄のようなものを緑色の液体と共にだらしなく流し、口からは舌が飛び出ているスリーピーホロウの死骸

があった。それを見ながら、空也はあざ笑うと、モミジ討ちでスリーピーホロウの死骸を燃やしつくした

「つ～ぎは・・・・決めたぜ！！！Ｃｈｉｎｅｓｅ！！」

中国へと向かうことに決めた、空也だった

SECOND DAYS 3（後書き）

勝因　空也が脳天を突き刺したこと。むしろあれで死なないドラゴン達は強すぎる

あっさりすぎたな

SECOND DAYS ANOTHERSIDE（前書き）

はい、今回はある意味説明です。使いまわし？いえいえ、聖夜です

SECOND DAYS ANOTHERSIDE

朝霧空也がスリーピーホロウを倒したのを、地球が無数にある空間から見ている者がいた。漆黒の黒い長髪を持ち、服は半袖半ズボンという至って普通な少年がいた。しかし、放つ威圧感は近くに居る者を圧倒し、飲み込むほどの者だった。

「地球の記憶持ちとは・・・驚きだぜ」

創造神・・・・空刀聖夜はそう言いながらホログラムのようなキーボードを動かし、ある物を作っていた。それはＵＳＢメモリを少し巨大化させたような物であり、音声を出すところの下には『Ｂ』と書かれていた。もうひとつの方には『Ｇ』と書かれていた。聖夜はキーボードを消すと両方手に取り、ついているボタンのようなものを押す

『ＢＬＩＺＺＡＲＤ！』

『ＧＯＤ！』

ブリザード・・・・吹雪の記憶を宿した『ガイアメモリ』であり、使用者の身体能力を上昇させ、氷の力を操る能力を与えるガイアメモリである。その力はアイスエイジのメモリなど比較にもならないくらい強いものである。

そして、Ｇのメモリ・・・・気づいている方も居るだろうが、神の記憶を宿したガイアメモリであり、身体能力を格段に上昇、さらに五元・・・つまり火、水、土、風、霊の力を使用者に与えるガイアメモリである。しかし、二つのガイアメモリは癖がありすぎ、Ｂのメモリはまだ普通に適合するくらいだが、Ｇのメモリは真の適合者

にしか反応しないのだ。何故聖夜が反応したのかは、神だからである

「ま、さしずめあいつの身体に宿っている・・・いや、日本刀の方に力が宿っているんだぜ・・」

聖夜はそう言いながら静かに青色と金色の・・・『ロストドライバー』を取り出すと、青色の方にBのメモリを、金色の方にGのメモリを同封すると、そのまま某スキマ妖怪が使う、スキマに入れると、不意に炎の弾丸を撃ち込む

「いるんだろ・・八雲、ばればれだぜ」

「あら？気づいてたの聖夜」

スキマから半分だけ身体を出したのは、賢者とも言われる幻想郷の作り手『八雲　紫』だった。

「はぁ？あんなに気配出してたんじゃ普通にばれてるんだぜ」

「いや、貴方気配というか直感でしょう」

「わるかったんだぜ」

「貴方・・・その『だぜ』変よ。魔理沙が真似してるのは貴方のせい？」

「さあな」

この空間、入れるのは神・・・それも主神、ゼウスやオーディン、トール、シヴァなどしか入れないが・・・紫や邪神など、聖夜が許

容している存在に関しては普通には入れるらしい。

「ま・・・しばらく暇でもつぶしているんだぜ」

「趣味悪いわね・・・貴方なら世界をいくらでも捻じ曲げることはできるのに・・・」

「それは意味がないんだぞ紫・・・その世界の人間にやらせるからこそ意味があるんだぜ」

「ま、幻想郷じゃないからいいかしらね。では、また今度」

「一生くるな色気しかねえ年増」

聖夜は悪口を言うと、またモニターのような物に向き直る

「楽しませて貰うぜ・・五条空也・・・期待しているんだぜ」

SECOND DAYS ANOTHERSIDE（後書き）

聖夜・・・言葉に最後に、台詞の最後に必ず「だぜ」がつく。ニュアンスがおかしくても

THIRD DAYS

空也は乗り捨てたジェット機をまた使い、中国まで飛んでいる途中だった。しかし・・・

「うおぉぉ！？あのドラゴンめ・・・・乗り捨てるしかないのか！？」

そう言いながらも空也はドラゴンの追撃をよけようとするが、空也自身が操縦の仕方を知っている程度のレベルなので、避けようにも避けられず、あえなく撃墜された

「うわあああ！！！！！」

そう叫びながら空也は突如吹き荒れた突風に運ばれ、中国ではなく香港へと落ちて行った

「我は聞きたいことがあるのだが・・・」

「僕もです」

「おいおい、何でこうなってるんだよォ？」

上から数えると、高圧的なしゃべり方をしているのが、慈円炎忌（じえんえんき）、敬語のような口調で話しているのが蛇川乱太（へびかわらんた）、某第一位に似た口調

で話すのが、狂音瞬(くるいねしゅん)である

「はぁ？俺はただ中国じゃなくて香港へ飛ばしただけだぜ？」

「何度も言ったはずだ、我等は世界に干渉してはいけないのだぞ」

聖夜がそう言うと、炎忌はそう咎める。さらに、瞬がうんざりしている顔で炎忌に言う

「おいおい、お前はその口調をなンとかできねえのかァ！」

「我を愚弄するのか？そんなに死にたいのかこの塵芥は」

瞬がうんざりというと、同じように怒り始めた炎忌はそう言いながらロストドライバーとG・・・ジェノサイドのガイアメモリを取り出していた。瞬もサメ・クジラ・オオカミウオの3つのメダルが入った円形の物・・・ポセイドンドライバーを取り出していた

「二人ともやめましょうよ・・・・」

おろおろしながら乱太がそう言うが、二人はそれぞれのベルトを腰に巻きつけた

『ＧＥＮＯＣＩＤＥ！！』

「「変身！」」

『サメ！クジラ！オオカミウオ！』

『ＧＥＮＯＣＩＤＥ！！』

炎忌の方は血のような赤色の装甲が身体に張り付き、その姿を、ジョーカーを血のような赤色に塗りつぶしたライダー・・・仮面ライダージェノサイドへ変身した。一方の瞬は頭がサメのような頭で、肩には左から右へクジラを模したような飾りがある。胸板辺りにサメ、クジラ、オオカミウオの紋章があり、腰には赤い、オオカミウオを模したような腰当てがあり、上半身は青、下半身は赤に彩られたライダー・・・・仮面ライダーポセイドンへと変身した

「まったく・・・俺がとめなきゃいけないんだぜ・・・」

『ＧＯＤ！！』

「変身」

『ＧＯＤ！！』

聖夜があきらめたような口調で言うと、金色のロストドライバーにゴッドのガイアメモリを装填し、右に傾け、その身体に金色の装甲が張り付いていく。聖夜が鎮座していた王座に居るライダー・・・エターナルのメモリスロットをそのままに、白色のところを金色に染め上げ、青い炎の模様を銀色にし、複眼が青いライダー・・・仮面ライダーゴッドへと変身した

「あわわわわ・・・・・・」

乱太はそう言いながら避難し、３人のライダーによるミニライダー対戦が怒っていた

そのころ、空也はなんとか香港の一番高いタワーに着地していた。ほとんど骨が折れていないところを見るとやはり人間離れしているといえよう

「おう？何で暗いんだろうな・・・かろうじて明かりはあるけれどなぁ」

空也はそう言って、その場から飛び退いた。その瞬間、

ドガガガガガッ！！！！

「あいつは・・・ザ・スカヴァーか！？」

空也自身も名前があっさり出たことに驚いていたが、そのでかさは異常で、軽く何キロメートルもありそうな胴体を持っていた。ザ・スカヴァーが通り過ぎた後には何も残っていなかった

「あんなのとやりあわなくちゃいけないのかよ・・・・」

THIRD DAYS 2

「あんな帝竜・・・どうやって倒せばいいんだろうな・・・・住処を暗くする・・・光が苦手か。でもそんな光、よっぽど強力な光源がないと出来ないしな・・・・」

空也はそう考えながら、その場のがれきに座り込む。その刹那、空也は飛び退くと、空也がいたところには青い斬撃のような物が通過していた。避けていなければ一発で死んでいただろう

「誰だ」

「おォ、良く出来ましたァ」

問いかけにこたえたのは、白髪で目が赤い青年・・・・・狂音瞬であった。赤い槍にもたれかかりながら面倒くさそうな目をしていることから推測すると、おそらく無理矢理行かされたのだろう

「無論、あンな攻撃避けられなきゃなァ、この国の帝竜も倒せねえよなァ。この国の帝竜を倒す鍵・・・それは発電所を再稼働させりゃあいい。せいぜいがんばりな」

「・・・・すまない」

「何、俺も無理矢理行かされた口だからなァ。お前はあの聖夜が一目置いている奴なンだよ。俺から言えるのはこれだけだ。じゃあな」

瞬はそう言うと槍で空を切り裂き、作り出された裂け目をくぐり抜

けてどこかへと去って行った。空也は無言でこの国の発電所らしきものを探すため、走り出した。

「ハァ・・・ハァ・・・ぶっ通しで走ってるからな・・・それにしても見つからない・・・電線っぽいものたどればって・・・地下ケーブルとかもあったよな・・・」

そう言いながらも空也は稲光を地面に立てると、倒す。倒した方向が指し示したのは、真横。空也は稲光を拾うと真横を向いて走り出した。

「やっぱり・・・ついた」

どうやらあのあてずっぽうな行動でついてしまったらしく、ここでもチートぶりがうかがえる。そして、空也は発電所へと踏み込んだ

「おい、きちンと俺は伝えてきたぞ」

「分かったんだぜ」

瞬がそう言うと、聖夜が作業をしながら適当に返す。それにあきれたのか瞬はその場から消え去る。それを一瞥すると、聖夜はため息をつくと

「鹿目まどか・・・円環の理・・・人から神になった存在・・・・あの子ならこの世界を元通りに出来る・・・・かもな」

そう聖夜は呟くと、またその場から消え去った

空也は発電所で電気を復活させるはず・・・だったが、地下に迷い込んでしまい、驚愕の物を見てしまった。それは

「むごい・・・な」

とある記録。そこには“ＨＯＭＵＲＡ　ＡＫＥＭＩ”と記されていた。それを読み進めていくと、さらに　円環の理　“ＭＡＤＯＫＡ　ＫＡＮＡＭＥ”や“ＳＡＹＡＫＡ　ＭＩＫＩ”などとも記されていた。さらに読み進めると

「巴マミが死ぬことになった魔女、“シャルロッテ”美樹さやかが魔女化した存在“人魚の魔女”その戦闘で死ぬことになった“佐倉杏子”最強の魔女・・・“ワルプルギスの夜”・・・写真もある。誰が撮ったんだ？しかし、人間がいなくなった今じゃ、ほとんど・・・・いや、今現在の状況をみると、そうでもないようがな」

空也は現在進行形で、自分が今見たデータの中にある・・・薔薇園の魔女の手下の１つ、『警戒』の役割を持つ手下であり、蝶の羽を持ち髭を持っていた

「さぁてと・・・・殺しあおうぜ！！」

FILING　この世界（前書き）

今回は小説の世界についてまとめてみました。年号も出してみました

ＦＩＬＩＮＧ　この世界

この小説の世界を簡単に説明すると、最初は『魔法少女の世界』で、空也がこの世に生まれたあたりから、『セブンスドラゴンの世界』へと変化。ライダーの世界でもないのでディケイド、紅渡も知らず。

ここからは年表です。だいたいこの世界と技術は変わりません

２０００年　２０世紀から２１世紀へとなった。このころからこの世界のインキュベーターが宇宙の寿命を延ばすために活動開始。

２００１年　日本のＸ市で大火災事故　死亡者だけでも２００人に及び、重軽傷者が１００人で、無傷で救助されたのは当時１１歳の少年だけだった

２００２年　国際テロ組織『ｅｎｄｌｅｓｓ』がアメリカ・ホワイトハウスを爆破。これにより当時の大統領や政治家が死傷者合計で２０人いた。このテロ組織はまだ捕まっていない

２００３年　新たなエネルギー、光子力理論が立証されたが、当時の学界は実現不可能として、立証した科学者を学会永久追放とした

２００４年～２００８年　この時期にとある病原菌が大流行。世界全体でみると３億人が死亡。４億人が後遺症を残した

２００９年～２０１９年　聖夜がこの世界に介入開始。それと同時に鳴滝が一時この世界に潜伏、その後別の世界へと渡る

２０２０年　魔法少女まどか☆マギカの本編開始、暁美ほむらが時間を繰り返した回数は少なくとも２０回、聖夜が気付くも黙認。そしてまどかが円環の理となり、世界が再構成される。聖夜はそれを少し手助けした

２０２２～２０３０年　炎忌、乱太、瞬が聖夜の仲間へとなる。また、この間にほむらは本編の魔法少女記録をまとめる。

２０３１～２０９０年　この間に人類は大きく進歩、タイムトラベル理論やコズミックエナジーなどの理論を確立し、太陽系外へと進出する。さらにドラゴンの進行を予想し、とある計画を２０９０年に実行する

２０９１～２０９９年　聖夜とまどか接触

２１００年　本編開始。人類滅亡の危機と共に朝霧空也が力を得る

THIRD DAYS 3

「多すぎるんだよ！！！」

空也は言いながらも使い魔を斬り倒し、攻撃をよけながらそう叫んだ。使い魔は倒しても倒しても無尽蔵に出てくる。

「（本来魔女はいないはず・・・だよな。なら何故だ？）」

冷静に推測を立てるが、その間にも攻撃は続く。それをよけながら攻撃していると、一つの画面が空也の目に入った。その画面があるところに空也は転がりこむと、画面にある文字の羅列を読み始めた。

『この世界まどかが守り切ったこの世界を。私は守り抜きたい』

「（これは・・暁美ほむらの記録・・・）」

『私はこの時間軸のあの一カ月の出来事をここにまとめた。そして、まどかを取り戻すための研究を1年間続けている間にも魔獣との戦いは続けていた。でも、そんな生活からか病気にかかって、今これを書いている時点では余命は3カ月。私はこれから起きる出来事をここに記すわ』

「・・・なるほどね」

空也は読みながらも近寄っている使い魔を蹴散らすと、また読み始めた。

『これから起きる出来事、多くは記せない。でも、少しなら記せる。

２０９０年の間に、キー計画というものが発動される』

「キー計画・・・当時２００億人に膨れ上がり、パンク寸前だった人類の中の１６０億人を応募で各国が選出し、最先端技術で作り出された宇宙船に乗り込み、宇宙の新天地を目指す計画・・・参加者は今もコールドスリープで眠りについているか・・・おじゃんか・・・・新天地を手に入れたか」

空也の説明の通り、２０１１年でこの世界の人口は７０億人・・７９年の間に発展途上国、先進国が子供を増やしたために人口が膨れがあり、食糧不足にまで落ちいった時に発案された計画で、各国が人間を選出し、合計が１６０億人の人類を宇宙船に乗り入れてコールドスリープで眠らせ、新天地を目指すという計画だった

「何故・・・・知っている」

そう、２０２０年くらいに生きていた暁美ほむらが地球に残っていたとしても、２０９０年には９０歳や１００歳くらいになっている可能性もあるのだ。しかし、余命は3カ月と言っている事と、魔獣と戦っていることから推測して恐らく１５歳の可能性が多いと空也は推測していた

『その計画の真意は、大を助け小を切り捨てる・・・２１００年に襲来するドラゴンのことを予期した各国首脳が作り出したこと。つまり、残りの４０億人は地球という牢獄に捕らわれた生贄よ』

「なるほどな・・・・」

ギリリ、と歯ぎしりをしながら使い魔達を全部殲滅すると、空也は稲光を鞘にしまう。そして、本腰を入れて読み始めた

『それに気付いた私はここにこうやって記した。それを教えてくれたのはこの時間軸。いえ、創造神　空刀聖夜とまどかだった。まどかは未来からやってきたと告げ、私にこの事をすべて教えてくれた。しかし、これを世界に伝えるには私の命が少なすぎた。そして、ここにこの記録を隠し、余生をまどかと共に過ごすことに決めた。これでこの記録は終わる・・・でも、２１００年に生き残ってこれを見ていたら、これを使ってほしい』

それと同時に画面に備え付けられていたパネルから一つの宝石が出てきた。それは淡い輝きを放っている黄色い宝石だった

『これは空刀聖夜からもらった物・・・これを見たあなたの役に立つはずだわ。貴方はこの地球の希望。だから・・・ドラゴンなんかに負けてはだめよ。絶対に』

空也はそれを読み終えると、黄色い宝石をひっつかんでポケットに無造作に入れる。その目には何か、色が戻っているような感じがしていた

THIRD DAYS 3（後書き）

ちなみにこの記録を書き残したほむらは本編終了の1年後であり、その間に魔獣討伐、研究を両立していた無理がたかって不治の病にかかり、余命である3カ月を聖夜とあった未来のまどかと過ごして、死亡したという設定です。ほむらファンの皆様すみません

THIRD DAYS 4

「んで・・・・何の用なんだだぜ」

『うん・・・ほむらちゃんがいたあの世界・・・あんなことになっちゃったんだね』

「ああ。ま、希望の１６０億人がいるけどな。空也はその真実に気付くか、て言うところだ。決めては、だぜ」

『その「だぜ」っていう口調なんとかならないかなぁ？』

「ま、なんとかならないということを言っておくんだぜ」

とある空間にて、再び、空刀聖夜と円環の理《鹿目まどか》が邂逅した

「んで・・・ここが発電システムを再起動させるキーか・・・」

２０１１年の文明と２１００年の文明は大きく違う。火力、水力、原子力などに頼っていた２０１１年とは違い、２１００年では空気中の窒素を取り込み、発電させる方式が作られていた。スイッチを入れれば再び動き出すはず・・・と空也は推測した

「スイッチ、オン。ってな」

そして、空也はスイッチを入れると同時に発電システムが再起動した。それを示すかのように辺りの画面が点灯した。そして、その画面に数字の羅列が浮かび上がり、羅列が消え去ると、画面には変な紋章が浮かび上がっていた。

「また・・・・魔法少女・・・・って、タイムマシンまで作られていたのかよ・・・・・過去を変える気はしないがな」

そう言うと、空也はその場から立ち去って行った。そして、外に出ると街頭がともり、少し歩くと身悶えるザ・スカヴァーがいた。この帝竜は光に弱く、豆電球程度の電気でも少し動きが鈍くなるほどだ。しかし、人間にとっての鈍いとは違い、今の状況でも他の帝竜と変わりない強さを持っているが

「さぁてと・・・どたま、ぶっち斬るぜ!!」

空也は開口一番、稲光を抜刀し、頭めがけて袈裟切りを使用し、切り裂こうとしたが目の前にザ・スカヴァーの尾が有り得ない速さで迫り、尾の打撃が当たる前に空也は回避、そして一回離れる

「でかい癖に動きが早いな・・・・なら・・・・」

ギュオ、という風の音が鳴ると、ザ・スカヴァーの近くにいつの間にか空也がいて、鞘にしまわれている稲光を少し抜刀すると、目にも見えない速さでザ・スカヴァーの尾を切り刻んだ。そして稲光を鞘にしまうとザ・スカヴァーの尾が何連続も切り裂かれ、使い物にならなくなるくらいにぼろぼろになった。

「ＧＹＡＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！！！！！」

ザ・スカヴァーはそう吠えるとその場からはいずって逃げようとしていた。しかし、もはや使い物にならない尾が邪魔をして、移動のスピードを遅くさせる。空也は一気に近づくとザ・スカヴァーの背中に乗っかると、一気に稲光を突き刺す

「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！！」

ザ・スカヴァーは叫び声をあげると、空也を乗せたまま横へ大きく揺れる。それを見逃さずに空也は稲光を引き抜き、頭部まで移動するとザ・スカヴァーの首に日本刀をあてる。

「大門オロシ・・・横バージョン」

一閃、それだけでザ・スカヴァーの生命は終わりをつげた。頭部はくるくる回りながら地面に落ち、雲が無くなり、太陽が現れた途端に融けて消えた。尾や胴も同じように溶けて消え、残っていたのは牙だけだった。その牙を手に取ると、

「いらねえな」

と、空也は放り投げようとしたが、その手を誰かがつかんだ

「誰だ」

「いえ・・・その牙を捨てると後々厄介なので捨てないようにしているだけですが」

緑髪の男・・・蛇川乱太はそう言うと空也の手を離す。空也は仕方

なく牙を懐にしまいながら問いかける

「んで・・・次の帝竜の居場所は？教えてくれるんだろ」

「鋭いですね。次はバチカン市国にでも行ってみたらどうですか？死と生の境界があいまいになっているみたいですから」

「分かった・・・・後、この世界は狂っているのか？狂っていないのか？」

空也の問いかけに乱太はしばし、考え込むとやがて口を開いた

「さあ・・・ボクは神様ではありません。それに、神様でも分かりませんよ。暁美ほむらの事がかかわっているんでしょう」

「良く分かったな」

「いえ・・・彼女は紆余曲折ありながらも、幸せになった。それでいいじゃないですか。では」

「ああ・・・変な事を聞いてすまなかった」

そう言って乱太はその場から描き消えた。空也はそれを見ると、振り向いて歩き出した

THIRD　DAYS　5（前書き）

あえて言いましょう・・・次章は聖夜達本格的にからませる目的・・・あとハッピーエンドなしは人類目線で、空也目線的にはハッピーエンド近いです。あ、ネタバレやん

THIRD DAYS 5

「バチカンまでどうやって行くかな・・・・」

ここからバチカンまで行くのは相当な距離があり、歩いて行くのは一カ月近くかかってしまうはず・・・そう空也は考えると、また適当なバイクを盗み出す・・・ということを考えたが、海をバイクで越えていくのは無理だと悟り、落ち込んでいるところであった

「あ～あ・・・ま、適当な船を奪うかな・・・」

そう言うと、駆け出すが、不意にその足が止まる。

「・・・・・誰もいない・・のか？」

しかし、空也は止まることなく走り出した。その走り去っていく後ろ姿を見ていた人間・・・慈円炎忌は自分の持つジェノサイドのガイアメモリと、Kと書かれたガイアメモリをそれぞれの手で弄びながら気配を消してみていたようだ

「ふん・・・我の気配に気づかぬとはなんという狼藉者だ。だが、我は優しいから見逃してやるか」

そう言い残すと炎忌はその場から消えた。

「こんなのでいいか。燃料も満タンだし」

空也は自分の中にある記憶を探ると、船などに関する知識が入っているのを確認したうえで船を選んだ。燃料やエンジンの状態を考慮した上で、だ。そして船のエンジンをかけると（船のキーを壊してエンジンをかけた）そのまま海の向こうへと乗って去っていく。次の国、バチカン市国へと続く国へ

「へ～、あいつバチカン行ったのか・・・あそこ嫌いなんだぜ」

「それよりも真面目に考えてください。プレ○テ2で．ｈａ○ｋやらないでくださいよ・・・・」

聖夜は某テレビゲーム機で某映画化したゲームをやっていると乱太からあきれ半分の声で言われた。聖夜はそれを聞くと、ゲームを一旦中止した後、乱太に向いた

「だからお前はいつまでたってもへぼ川へぼ太なんだよ」

「無理矢理すぎますよそれ！！？」

さて、シリアスとメタい事を言いながら聖夜がゲーム機を消すと、空也を見ながら一つの石・・・霊石アマダムを取り出していた

「あいつの体内から出したアマダム・・あいつ、前世のクウガの力がそのまま残っている口なんだぜ」

「なるほど・・・僕のオルタリングと同じようなものですか。とりあえずそれはまだ出さないほうがいいと思います」

「ああ、まだ時期じゃない。こいつは帝竜全てを殺した後に渡す。そして・・・その時に、この世界のすべてを話すんだぜ」

そう言うと聖夜は消え去り、乱太はアギトトルネイダーにまたがってその場から消えた

THIRD DAYS 5（後書き）

ネタばっかやん

yesterday　過去と現在と未来（前書き）

今回は・・・あれ？俺何書こうと思ったっけ？やべ、忘れた！

というのは冗談ですよ（；^・ ^）番外編の位置づけですけど

yesterday　過去と現在と未来

これは・・・本編中に空也が知りえない過去・・・赤き戦士と蒼き戦士のビジョンが意味した光景の意味を、今日解き明かそう

「というわけで、空也の過去を調べるんだぜ」

「いいのかな・・・？勝手に人の過去なんか調べて」

「いい。空也には教えないんだぜ」

これは・・・二人が調べた空也の過去・・・『朝霧空也』としてでも次の世代の『　　』としてでもない前の世代『五条クウヤ』としての一生である。クウヤは空也と同じように普通の学生だった。古代の遺跡でベルト・・・アークルを手にするまでは。

～五条クウヤ～

「何なんだよあいつ！？このベルトは死守しないと・・・」

このときはまだ、×××ではなかったクウヤに出来たことは、逃げることしかなかった。逃げて、逃げた。しかし、追う未確認生命体・・・ズ・メビオ・ダに回り込まれてしまった。その拍子にクウヤはアークルを腰に装着し、白のクウガに変身してしまった

「変わった・・・・」

『バ・・・ババ！！！クウガ！』

『ボソギデジャス！！』

グロンギがクウガに襲いかかり、その時のクウガは敗れてしまう。しかし、人々から笑顔を奪うグロンギを見たクウヤは・・・原典のクウガでもある、『五代雄介』と同じ決意をし、同じ変身ポーズをし、同じ掛け声で変わった

「変身！！」

そして、五代と同じように戦ったが・・・・アルティメットを制御できずにグロンギでもあるン・ガミオ・ゼダを殴り殺し、ン・ダグバ・ゼバからもこう言われた

「貴方も私と同じ・・・化物だからね。化物は化物どうし、仲良くしようよ」

「あ・・あああ・・ああああああ・・ああああああ・・・ああああああああ！！！！！！！！！！」

この経緯からかクウヤの精神は崩壊、グロンギが世界に侵攻し、人間はすべて死に絶えようとしていた。その最中に精神が復活したクウヤにより、とある方法でグロンギ全てと感覚、精神などのすべてを共有し、その上で自害、地球を救った

「・・・・・・」

「・・・・・ま、いいんだぜ」

そして、空也とクウヤのつながりを聖夜は抹消した。空也の中に眠るアークル、それを遠隔操作で取り出し、跡形もなく破壊した

ｙｅｓｔｅｒｄａｙ　過去と現在と未来（後書き）

グロンギ語が非常に難しかった。ここで、謎解明を

何故ン・ガミオ・ゼダがいたのか？ンの怪人が二人いたのか？

答えは・・・・この世界が原典とリイマジが融合して出来た世界だからです。しかし、その世界は脆いためにンクラスの怪人が２人も出来てしまい、さらにクウヤの生い立ちも関連してガミオは死ぬが、その代償にクウヤの精神が崩壊し、ダグバがクウガを手にいれることになりました。リイマジと融合しなかった場合はクウヤは崩壊したうえで立ち上がり、ダグバを倒すまでに至り、そこで雄介がダグバに教えることのできなかった物を教える・・・というラストになるはずでしたが、ディケイドの影響によりハッピーエンドにはならなかった。というわけです。ちなみにダグバは女。

最後に一言

本当にすいませんでした！！！！！

登場人物まとめ　～神々ｓｉｄｅ～（前書き）

聖夜陣の登場人物をまとめてみました

登場人物まとめ　～神々ｓｉｄｅ～

空刀聖夜／仮面ライダーゴッド

性別：男

年齢（外見）：１６歳　実年齢　１００歳（神の中では最年少）

容姿：鏡音レンの髪を黒色にして長くする。眼は少したれ目

性格：ポジティブ・シンキング。明るくお気楽。しかし、真面目なところでは真面目。語尾には必ず「だぜ」がつく。たまにつかない時もある

説明：とある世界で死亡し、創造神から無理矢理力を授けられて創造神へとなった。その能力には制限などというものがなく、時間移動から物体創造までやってのける。攻撃にも全属性を使えるが好んで使うのは雷

仮面ライダーゴッド

『ＧＯＤ』のガイアメモリで変身する。アポロガイストのＧＯＤ機関とは関係ない。

外見：仮面ライダーエターナルの白い所を金色に、黒色のメモリスロットを銀色に、マントは黒色。

スペック：背丈はエターナルと同じ。しかし、スペックがＣＪＧＸ並みにある

武器：エターナルエッジを金色に染め上げた『ゴッドエッジ』。これにゴッドメモリを挿入することにより任意の対象のすべてを操る『マリオネットデイズ』を発動することが出来る

必殺技：マキシマムスロットにゴッドメモリを挿入して発動する『ＹＡＨＷＥＨ』や『ダークメモリ』を挿入することによってできる『ＧＯ　ＴＯ　ＨＥＬＬ』・シャイニングメモリを挿入して使う『ＡＰＯＬＬＯ』などを発動することが出来る。他にも、聖夜が作り出したＡ～Ｚのメモリを全メモリスロットに挿入することで発動する『ＴＨＥ　ＥＮＤ』などもある

狂音瞬／仮面ライダーポセイドン

性別：男

年齢（外見）：１７歳

容姿：黒色の髪に若干つり眼で、髪には青色のメッシュを数本入れている。

性格：戦闘狂だが、自分で望んだ戦闘以外は好きではない。口調は完全一方通行

説明：とある世界で仮面ライダーポセイドンとして戦い、死んだ青年。しかし、聖夜の力でよみがえり不老となった。不老不死ではないのだが、病気では死なない為、過度の肉体損傷で死に至る。しかし、聖夜によって身体がすごく丈夫になった為、それは実質有り得ないこととなっている。能力は水を操る。ポセイドン時の槍を出現させることにより戦う。

仮面ライダーポセイドン

スペック・外見ともにＭＥＧＡＭＡＸと同じ

武器：正式名称『ディーペストハープーン』

必殺技：技らしきものは槍を振って飛ばす衝撃波のようなものしか出ていないが、ここでは別の必殺技を紹介する。槍に水を纏わせて斬りつける『アクエリアス・ザンバー』やレンゲルのように水を纏わせて蹴りつける『アクエリアス・ブレイク』を使用する

蛇川乱太／???

性別：男

年齢（外見）：１８

容姿：灼眼のシャナのシャナの背を伸ばし、髪を緑色に染め上げた感じ

性格：おとなしい・口調は少し敬語っぽい

説明：こちらもとある世界で戦っていた青年。死んだあと瞬と同じ経緯で身体が不老となった。本編中ではまだ明かされていないこともある。能力は全属性を扱える

慈円炎忌／仮面ライダージェノサイド

性別：男

年齢（外見）１６

容姿：灼眼のシャナの佐藤啓作の髪を赤く染め上げた感じ

性格：完全ギルガメッシュですねそうですね。口調もそうですよ

説明：とある世界で王として君臨していた青年。王の名に恥じない実力と、統治の仕方により国民より信頼を得ていたが、聖夜と出会い、王としての地位をすて聖夜の仲間へなった。身体は瞬・乱太と同じような身体で不老。能力は炎を扱う。（初期では王の財宝を使わせようと思ったが、チートすぎるのでやめた）

仮面ライダージェノサイド

スペックはＣＪＸ並み。ジョーカーを赤く染め上げた感じで、『ＧＥＮＯＣＩＤＥ』のメモリで変身する

武器：ベルトの左側にあるボタンを押すことにより出る『ジェノサイドマグナム』や『ジェノサイドシャフト』や素手で戦う

必殺技：ベルトのマキシマムスロットにジェノサイドメモリを入れることにより発動する、『ライダーキック』・『ライダーパンチ』やジェノサイドシャフトにメモリを入れることにより発動する『ライダージャベリン』、ジェノサイドマグナムにメモリを入れることで発動する『ライダーシューティング』などがある

鹿目まどか

性別：女

年齢（外見）：１４歳

容姿：原作と同じだが、本編最終話で見せた。神様まどかの服

性格：原作と同じ

説明：原作と同じ経緯で概念化したが、この世界では概念を通り越して神へとなった（それでも概念に近い）。聖夜の力により心を取り戻したことにより、現在は空也を見守っている

霊宮「疲れた～」

聖夜「お疲れ様なんだぜ！！」

蛇川「ｏｒｚ」

炎忌「お前のライダー紹介はまだ先だ。それにしても我の説明が一番長かったし経緯が一番語られていた！！それに王というのも気に入ったぞ霊宮！！」

瞬（あァ、帰って寝てェなァ）

まどか「少し瞬君は寝ようか」←弓矢で瞬を打ち抜く

瞬「　　」

全員（瞬・まどか抜く）（（（（まどか黒過ぎだろぉぉぉぉぉぉ！！！！！））））

FORTH　DAYS（前書き）

やばい・・・次の帝竜のネタが思い付かない・

FORTH　DAYS

～バチカン市国～

「おわぁ！！邪魔だ邪魔ぁ！！！」

空也は稲光を振り回し、押し寄せてくる人の大軍・・・否、死人の大軍を蹴散らしている。彼らはこのバチカンにいる帝竜・・・・ロア＝ア＝ルアの影響により死の淵から復活し、いいように操られているというわけだ。

「死体が・・・動くんじゃねえ！！！」

そう言って稲光を一閃、次々と人の首をはねていく。さらにどこからか取り出した銃で・・・

「ｔｅｉｒｏ・・・ｆｉｎａｌｅ」

などと某重火器当主の技を使っていたりした。そうしてゾンビを完全に殺すと、稲光を鞘にしまい、予備を含めた弾薬が切れたのでそれをまとめて処分した。

「さぁてと・・・どこに帝竜はいるのかね・・・・」

そういって月を見上げる空也の顔には・・・何故か、××××を沸騰させる表情が張り付いていた・・・

「なん・・・だと・・・」

「まさか・・・・他の神の介入!?」

「なンなンだよ!!!」

「どう・・なっているのこれ?」

「あ・・りえないんだぜ」

バチカン市国のゾンビの大群の中に、本来いないはずの人間が紛れ込んでいた。その人間たちは空也に殺害される前に逃げているため、いまだに逃走中・・・または潜伏中だった

慈円炎忌が言ったのは、『茜崎火音』。火音の記憶を宿したガイアメモリを自分が所持しているのにもかかわらず、何故この世界に居るのか

蛇川乱太が言ったのは、かつて自分が葬ったはずの男、『光月彰一』がいたことであった

狂音瞬が言ったのは、グリード達の人間体が紛れ込んでいた事であった。しかも、ウヴァ、カザリ、ガメル、メズール、ギルの5人が、だ

鹿目まどかが言ったのは、自分が知っている魔法少女・・・『暁美ほむら』『巴マミ』『佐倉杏子』『美樹さやか』が存在していたこ

とだ。この４人の共通点は、円環の理として自分が導いた存在であるということだ

空刀聖夜が言ったのは、自分が命と引き換えに殺した人間、『神山零時』が存在し、最終決戦の時の改造体で生きていたことだ

「どういうことなのだこれは！？本来この世界に神の介入はできないようにしているはずだ！！」

「嘘・・だよね・・・ほむらちゃんに、マミさんに、さやかちゃんに、杏子ちゃんが・・・なんで・・こんなところにいるの？」

「なんてことですか・・・・あの人とは・・二度と・・・」

「ありえねェ、有り得るわけねェだろォ！！」

「ありえない・・・・あいつがいるなんてこと！！！」

聖夜に居たっては普段の口調が砕けてしまっていた。その中でも炎忌だけが推測を始める

「（まさか・・・他の世界か？いや、そうだとしても火音などは性格が違わない限り動かないはず・・・ならば・・・！？まさか）」

炎忌がそう言って火音メモリを確認してみると・・・中の記憶がコピーされた証拠が残っていた。

「やはり・・・地球の記憶か」

炎忌がそう小さくつぶやくと、眼に殺意をたぎらせながら、ジェノ

サイドのメモリと火音メモリを睨みつけていた

FORTH DAYS 2（前書き）

ポセイドンのギミックどうすっかな？

FORTH DAYS 2

「あァ・・・あのグリードども地獄からはいでてきやがッて・・ぶっ殺す」

「落ちついてください・・・僕だって珍しく殺意がわき出ててくるんですから」

「そうだぜ・・・俺は道連れに零時を殺したはずだぜ」

上から瞬、乱太、聖夜がそう言うと、瞬がディーペストハープーンを取り出して次元を切り裂く。

「葬ッてくらァ・・・・・」

瞬はそう言って裂け目をくぐりぬけると、バチカンへと出た。そして、グリードの1人・・・『カザリ』がいた。それに水の衝撃を浴びせかけると、槍を突き出す

「やあ、ポセイドン・・・せっかくよみがえったのに邪魔しないでくれるかな？」

「今すぐ葬ッてやらァ！！」

そう言うと瞬は飛び退いて離れると、ポセイドンドライバーを装着してドライバーを反時計回りに回し、変身する

『サメ！クジラ！オオカミウオ！』

そして、水流に包まれ仮面ライダーポセイドンへと変身し、ディーペストハープーンをカザリに振りかぶる。カザリはそれを受け止めて瞬に蹴りを入れる

「っく！調子乗るンじゃねェ・・・三下が！！」

そしてディーペストハープーンで薙ぎ払うと左手を話してカザリにパンチをくらわせ後退させる。さらにカザリに槍を投降してつきさすと、ドライバーをさらに反時計回りに回す

『スキャニングチャージ！』

「地獄送りで許してやるよォ！！！」

そして足元から水が噴き出し、その水にカザリが巻き込まれている間に両足でキックする、『アクエリアス・ブレイク』をあてる。カザリはセルメダルを振りまきながら吹き飛ばされるが、コアメダルは一枚も出ている描写もなかった。ポセイドンはディーペストハープーンを構える。

「・・・・再生怪人が弱いっていうジンクスはもう存在しないんだよ？ポセイドン」

「（再生後より強くなりやがッてるぜ・・・）」

そう言ってポセイドンはディーペストハープーンを構えると、カザリとの間合いを計りながら、考えを巡らせていた

「（槍を突き刺して至近距離でやるか？いや、カザリの事だ。そんな隙はねェ）」

そして一気に間合いを詰めるとディーペストハープーンで斬りつける。それをカザリは爪で受け止めると、反対側の爪でポセイドンに斬りつける。それに少しひるんだポセイドンの隙をカザリは見逃さず、ディーペストハープーンを奪い取って突きをあてる。それになんとか右手で受け止めて奪い返すと、そのまま槍先から持ち手へと手を戻し、ポセイドンはもう一度間合いを詰める。そしてカザリは黄色い竜巻を発生させるとそれをポセイドンへぶつける

「だ・・まッてくたばりやがれェェェェ！！！！！！！」

その黄色い竜巻を気合いで跳ね飛ばすと、そのままポセイドンドライバーを反時計回りに回す。

『スキャニングチャージ！！』

ポセイドンはディーペストハープーンに水をまとわせると、それで呆然としているカザリを斬りつけて両断する。カザリの体内にあるコアメダルを9枚すべてを砕く

「ぼ・・・ぼ・・くは・・・ま・・だ・・欲望・・・を・・・」

「うるせェよ・・・地獄に落ちな」

カザリの意識があるコアメダルを壊すと、ドライバーを時計回りに回して変身を解く。

「地球の記憶・・・か？」

瞬はディーペストハープーンを担ぎながら、その場から消えた

FORTH DAYS 2（後書き）

再生怪人＝強いというジンクス化しやがった

FORTH DAYS 3（前書き）

まだまだ瞬サイドです。

FORTH DAYS 3

「死ねェ・・・死にやがれ・・・・グリードどもォォォ！！！！」

瞬が変身したポセイドンはそう叫びながらディーペストハープーンに水を纏わせて切り裂く『アクエリアス・ザンバー』をメズールに当てて爆散させる。さらに流れるような動きでガメルに斬りつける。

「地獄に堕ちろォォォォ！！！！！」

ガメルは重量系のグリード・・・パワーはあるが動きは遅い。そう推測した瞬はディーペストハープーン使い連続で切り裂く事により反撃の隙を与えずにいた。そして、槍をガメルに突き刺し、ベルトを反時計回りに回す

『スキャニングチャージ！』

「地獄よりも深く・・落ちやがれェェェ！！！！！」

ガメルの体内でアクエリアス・ザンバーを発動し、頭まで勢いよく切り裂くことにより、ガメルの意識コアにひびを入れる。

「メ・・・メズゥゥゥルゥゥゥゥ！！！！！」

「とッととくたばりやがれェェェェ！！！」

ポセイドンは意識コアを貫くとガメルをセルメダルの群れに戻す。さらに近くにあった水を槍にまとわせて意味もなく地面を斬りつける。そこにウヴァ・ギルがやってきた

「ポセイドン・・・貴方によき終わりを・・・」

「ポセイドォォン！！！！」

ウヴァがそう叫んで突進してくるが、それをポセイドンは受け流すと腹にパンチを加えてウヴァを後退させる。さらにディーペストハープーンで薙ぎ払い、ウヴァを大きく吹き飛ばす。さらにギルの蹴りを紙一重でかわすと、ディーペストハープーンで突きを当てて吹き飛ばす。

「さァてと・・・愉快な愉快な死体（オブジェ）にしてやるぜェ・・・」

『スキャニングチャージ！』

「おォォォォォォラァァァァァァ！！！！！」

そして、アクエリアス・ザンバーで一度目にウヴァ、そして二度目にギルを切り裂き、爆散させる。瞬は無言で変身を解くと、ディーペストハープーンで次元を切り裂いて、その場から消えた

FORTH DAYS 3（後書き）

何故コアメダルが砕けるのかは・・・硬くてもスキャニングチャージを受ければ壊れると思ったからです。あと再生怪人は弱い

FORTH DAYS 4

バチカン路地裏にて

「んで・・・葬ったこいつらはどーなんの？処理できるわけでもないしなー」

空也は魔法少女４人の中の一人を抜いて絶命させていた。しかし、血などは出ていないため、そういう殺し方をした事を感じさせる

「・・・“暁美ほむら”これはどういうことだ？」

「おそらく・・・他の神によるこの世界への介入だと思われるわ。聖夜を妬んだのか。はたまた、ただの暇つぶしかはさておいて・・・どうするのかしら？」

現在進行形で空也とほむらの周りは動く死体（ゾンビアーミー）が大量にいた。ほむらは盾からマシンガンを取り出すといきなり撃ち始めた。反動が本来はある・・・はずなのだがその場から一歩も動かずに撃っていた。

「やっぱり契約の副産物か・・・しかも神によってソウルジェムに穢れが溜まらないようになっている・・・ま、俺もやるか」

稲光を鞘から抜こうとすると、ほむらが拳銃を二丁投げ渡してくる。それを空也は右手と左手でキャッチする

「使え・・・か」

そう言うとゾンビアーミーの頭を的確に撃ち抜いて動きを止める。

使えなくなった拳銃をゾンビアーミーの顔面めがけて投げつけ、もう一方も撃ちきると、投げつけ、稲光を抜刀する。

「オラァァァ！！！！」

ゾンビアーミーの首を稲光ではねると勢いにまかせて、何体かのゾンビアーミーをまとめて切り裂く。一方のほむらは撃ち切ったマシンガンでゾンビアーミーを殴りつけ、さらに投げ捨てると手榴弾を一個取り出し、ピンを抜く

「巻き込まれるから避けときなさい！！！」

「無責任だ！」

空也が壁と壁を蹴って空へ逃げると同時にほむらが手榴弾を投げつけ、爆発させる。さらに爆発の影響で巻きあがる埃の中、何故か眼にゴーグルをつけている空也が埃の中でゾンビアーミーを切り裂き、半数のゾンビアーミーは切り裂かれる

「ほむら！でかいの一発ぶちかませ！」

「分かったわ」

そしてほむらは盾の中から・・・対戦車用ライフルを取り出すと、残りのゾンビアーミーに発砲し、あと数人いるというところまで追いつめた。そこに、炎が巻きあがり、ゾンビアーミーが灰に次々と変わる。これを見た空也はほむらを抱えて後に飛び退くと、空也のいた場所には炎の柱が上りあがった

「何だ・・・！？」

「あれは・・・・!?」

空也が燃え盛る爆炎の中、一人の男が歩いてきた。頬に切り傷があり、赤色の髪、濁り切った黒色の目、門矢士のような服（ライダー大戦の世界の服）をきていた

・・

「お前らが炎忌の言っていた奴か・・・さてと・・・お前らに頼みてぇことがある」

「誰だアンタ」

「ああ・・・茜崎火音だ。本題だが、俺と同じ顔をしてはいるが服は違うやつ・・・地球の記憶で複製された戦闘本能しかない俺をぶち殺してほしい」

火音はそう言うと炎の柱の中へ消えた。

「地球の記憶・・・なんだそれは」

「まあ、ここの帝竜を倒したら教えるわ」

そう言うと空也はほむらをおんぶすると、ほむらの時間停止により偽の火音がいる場所へと向かった

FORTH DAYS 4（後書き）

今回の３つの出来事！

１、魔法少女３人セリフもなく退場！！

さやマミ杏子「出番くれよぉぉぉぉぉ！！！！！」

２、ほむらレギュラー化！！！

ほむら「やったわ！これからまどかと毎日会える・・・」

空也「後書と前書きと作者様に送る感想と活動報告でしか会えないけど」

ほむら「ｏｒｚ」

３、茜崎火音登場！！偽物の抹殺を依頼した

火音「いやっほおおおおおお！！！！！」

FORTH　DAYS　5（前書き）

ほむらのソウルジェムについて

本来の流れ。（）の中はまどかが改変した後の世界での仕組み

キュゥべえと契約。ソウルジェムを手に入れる→グリーフシードによって浄化→穢れる→浄化→穢れる・・・・浄化しなくなる。美樹さやかみたいな状態へとだんだんなって行く。原因は人それぞれ→魔女化。ソウルジェムがグリーフシードになる

（キュゥべえと契約。この段階で魔法少女の真実は知っている→グリーフキューブでソウルジェムを浄化→穢れが溜まり切ると消滅。たとえば戦闘中に浄化する暇がなくなり・・・など）

この作品でのほむら

ソウルジェムに穢れが溜まる→穢れを大気中に放出。または神界に転送→穢れる・・・の繰り返し。つまりはほむらがまどかを抜くと事実上最強の魔法少女

FORTH DAYS 5

「んーと・・・さっきの奴っぽいのは・・・」

「死体が多すぎて探すことが出来ないわね・・・手榴弾で吹き飛ばしたほうが手っ取り早いかもしれないわ・・・」

「物騒な事言わないでくれ。頼むから」

とある建物の屋上にて、空也はそう言いながらどこからか双眼鏡を持ち、火音を探していた。しかし、こっちの空也も空也で

「ほむら、手榴弾用意」

「ええ、分かったわ」

ほむらはそう言って、手榴弾を楯から取り出すと安全ピンを引き抜きゾンビアーミーの大軍めがけて投げつける。3秒後、爆発

「・・・・いない・・・な」

「いない・・わね・・・」

そうは言いながらも空也は稲光を引き抜いて構え、ほむらは盾からライフルを取り出していた。そして、大きな炎が巻き起こると、その炎の中から、服が長いジーパンに赤色のランニング、だぼっとしているジャケットを着た火音が出てきた。しかし、眼が明らかな狂気に染まっている

「ＧＹＡＯＯＯＯＯＯＯ！！！！！」

「さっさと首斬り落とすぞ！」

「分かったわ」

ほむらはライフルを火音に向けて撃ち、火音がそれを避けている少しの間に時間を停止して、バズーカ、大砲、コイルガン、迫撃砲、を何十個も盾から出し、設置してから時間を動かすと同時に発射し、周囲を爆風で包む。さらに眼にゴーグルをした火音が突撃して火音を切り裂こうとする。が

「ＧＹＵＵＵＵＵＵ！！！！！」

「んなっ！？こいつ炎で・・・」

火音は炎で盾を作り出して稲光を受け止め、蹴って空也を吹き飛ばす。さらにドラゴンの翼のような炎を背中に生やすと、その翼をはばたかせて風を巻き起こし、空也とほむらを吹き飛ばそうとしている

「ちぃ・・・動けねぇし・・・」

「少しまずいわね・・・」

空也は稲光を建物の屋上に突き刺すことで対応し、ほむらは空也に？まることでなんとか吹き飛ばされないようにしていた。その間にも時間停止をほむらは使おうとしたが、暴風のせいでうまくできない・・・・そんな状況であった

「ほむら・・・なんかいい案はないのかよ・・・」

「ないわ。風がやんだらこの態勢で時間を停止してその間に至近距離で攻撃してから爆破。という方法しか思いつかない・・・」

刹那、風の力が急に強くなった。耐えきれずに稲光が建物の屋上から抜け、空也とほむらはなすすべもなく空中に打ち上げられる。途端に風はやむと、翼を生やした火音が空也に迫っていた。

「ＧＡＡＡＡＡＡ！！！！」

「だったら・・・・こいつかな。ほむら！」

空也は稲光を振りかぶる・・・と見せかけてほむらから投げ渡されたライフルを稲光を持っていない方の手で発射して反動により建物の屋上へとたたきつけられた。が、すぐに起き上がるとライフルを火音に向けて性格に発射し、ほむらはその間にバズーカ砲を取り出し、照準を火音に向けて合わせていた。

「こいつで・・・」

空也はジャンプして火音を切り裂いてダメージを与え、さらに上にたたきあげる

「これで・・・・」

その隙にほむらがバズーカ砲を発射。空也は火音をバズーカ砲の砲弾が通り過ぎる地点に両足で蹴り飛ばし、自分は建物の屋上へと逃げ込む。

「「終わりだ！！」」

２人でこう叫ぶと同時に砲弾が火音に当たり、爆発する・・・はずだった。

「んな・・・・」

「そんな・・・」

ほむらと空也の前には、地面に落ちている砲弾と、完全回復している火音、そして自分たちに向けられている、この時代の科学力でも作られていない者があった。超電磁砲（レールガン）、レーザー砲など、さらにはとある世界の武器・・『デバイス』を構える１００人近い人数がいた。圧倒的な物量を従えていたのは・・・

「神・・・か」

「聖夜より弱そうね・・・」

《神》がいた

FORTH　DAYS　5（後書き）

ほむらと空也のコンビネーション技『ｊｕｍｐｉｎｇ・ｓｋｙ・ｃａｎｎｏｎ』が発生した！

技説明：空中に居たため省かれたが、本来は地面に居る敵を空也が蹴り飛ばし、空中でさらに切り裂いて上へ飛ばす。そこにほむらがバズーカ砲を撃ち込み、空也がその軌道に入るように敵を両足で蹴り飛ばし離脱してから着弾し爆発するという技

・・・・・俺ェ・・・

FORTH DAYS 6（前書き）

今年ももう終わりだな・・・・

FORTH DAYS 6

「どうすっかなぁ・・・・」

「あえて言うなら撤退、それも無理なら玉砕するわよ」

「ひどいや（T＿T）」

「じゃ、逝ってきてね（ToT）／~~~」

顔文字使いまくりのこいつらをよそに、神を自分の武器でもある雷型の投降武器を構えると、ほむらと空也めがけて一気に投げつけた。それを空也は一飛びで避け、ほむらはその場から時間停止で逃げた。

「あれってゼウスだろ！オリンポス十二神色恋馬鹿！！」

「ええ、逃げるわよ。あれでも主神クラスなんだから」

そう言いながらほむらは空也の手を取ると時間停止を使用、時間停止中に空也が全速力で走り、その場から逃げた。

「逃げられたかの・・・」

ゼウスは顎を撫でながらそう言うと、追いかけようとしたが目の前に居る・・・ライオトルーパーの軍団を見て足をとめた

「空刀聖夜・・・お主は何故あやつにとある世界の竜殺しの力を与えた？」

「ッハ！手前みたいな浮気神に言うことはないんだぜ！つーわけで死んでくれだぜ！」

聖夜が一瞬でゼウスに迫ると、ゼウスは体を屈強な若者の姿に変えて拳を掌で受け止める。さらに聖夜はゼウスの顔面を蹴り飛ばして離れると、右拳に金色のオーラを纏わせてゼウスに殴りかかる。それをゼウスはオーラを纏った左腕で払いのけて右手で聖夜を殴り飛ばす。

「やるんだぜ・・・流石は主神って言ったところだぜ（まあ俺は本気パワーの２分の一も出してないんだけどな、だぜ）」

「貴様みたいな小童創造神に負けるはずなどｎ「淫乱爺に言われたくないんだぜ♪」ぐぼはぁぁぁ！！！！」

ゼウスが言葉を紡ぐ間に聖夜は右手を手刀にしてゼウスの腹を貫いていた。それを横に薙いで取り払うと、ゼウスの体は雷に包まれて消えた。そして聖夜はゴッドエッジを取り出すと、『ＳＨＥＬＬ』のガイアメモリ・・・封印の記憶を宿したガイアメモリゴッドエッジに差し込んでマキシマムドライブを発動させた

『ＳＨＥＬＬ！！ＭＡＸＩＭＵＭＤＲＩＶＥ！！』

それでゼウスの力の大部分を封印すると、ゼウスメモリを取り出す。

『ＺＥＵＳ！』

「んあ・・・・まあいいんだぜ。これだけ手に入っただけで上等・・・帰るんだぜ」

そう言うと聖夜はゴッドエッジで空間を切り裂いてから、その裂け目を通り抜けて帰った。そして、火音を含むゼウスの軍勢は全員死亡していた。

番外編！！！　～次回作について話そうぜ！～（前書き）

今年最後の更新！！

番外編！！！　～次回作について話そうぜ！～

聖夜「つーわけで作者が火音を主人公に、某作者さんに投降したキャラクターの墓守レイカを使用して作るオリジナル小説について話し合おうではないか諸君！！」

空也蛇川炎忌瞬まどほむ「ナニイテンダアンタ！！」

聖夜「いや、どこかの某魔王から話しあわないと俺（ｒｙ」

空也「つーわけで俺からの案言うぞ」

瞬「いや適応力速いな！」

空也「俺の案は・・」↑フリップを取り出す

茜崎火音が死んだあとに墓守レイカの世界へと転生↓能力そのまま↓１６歳のときに墓守レイカと出会う↓そして敵である組織と戦う（恋愛はない）

瞬「恋愛ねェンなら女子キャラ出す必要ねェだろうが！！！」↑ディーペストハープーンで空也を吹っ飛ばす

空也「シャシャシャウタ！！！！！」

まどか「コンボボイス！？」

聖夜「次は俺の案なんだぜ！」↑フリップを取り出す

茜崎火音が平行世界でｈ

瞬「お前はもう終わッてるンだァァァァァァ！！！！！」←ディーペストハープーンで聖夜を切り裂いた上で吹っ飛ばす

聖夜「ガ～タガタガタキリバ！！！」

ほむら「コンボボイス旧いわよ・・・」

蛇川「次は僕ですね・・・」←フリップを取り出す

茜崎火音×．ｈａｃｋ

瞬「まともな案だ・・・」

自分の記憶が所々亡くなった火音がＴＨＥ　ｗｏｒｌｄ　Ｒ・Ｘで記憶を探し求める物語（．ｈａｃｋ／／Ｌｉｎｋと同時期）

瞬「お前の案採用」

霊宮「ああ、しかし俺はやらないが」

まどほむ「作者！？」

霊宮「お前らが勝手やったせいでファミ通まだ立ち読みしてないんだよ！！」←とある武器で聖夜空也をたたき飛ばす

聖夜空也「スーパータトバタトバ！！！」

霊宮「次は俺が主人公だし」

炎忌「我のセリフをこれだけにするとは・・・まあいい。gd gd
だったのは我が謝る。すんませんでしたぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
↑ジャンピングしてスライディング土下座

瞬「つーわけで、良いお年をー」

番外編！！！　～次回作について話そうぜ！～（後書き）

聖夜空也「おい！！！！俺らの案はぁぁぁぁぁぁ！！！！」

霊宮「不採用だよバーカ」

聖夜空也「ｏｒｚ」

新年番外編！～みんなの初夢～（前書き）

新年あけましておめでとうございます！！

この話は本編とは全く関係ありません

新年番外編！～みんなの初夢～

～朝霧空也の初夢～

空也「お！！なすの味噌汁やん」

アンク「俺は鷹だ！！」

空也「いや、タカクジャクコンドルのアンク補正だろ」

富士山「その通りだ。味噌汁さめるぞ」

アンク「チ・・・・」

空也「何なんだこの初夢」

～朝霧楓夏の初夢～

空也「また俺かよ・・・」

楓夏「えへへへへへ・・・・」

空也「ま、いいか」

楓夏・空也「ＺＺＺＺＺＺＺ・・・・」

夢の中でも寝るんかい

楓夏「んああ～・・・お兄ちゃん・・・」

～暁美ほむらの初夢～

まどか「結婚してください」

ほむら「　　」

ガバ！！

ほむら「まどかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！」

空也「うるさぁぁぁぁぁぁいい！！！！！！！！」

～空刀聖夜の初夢～

鳴滝「ディケイド！！貴様の旅もここで終わりだ！！」

士「いや、俺には仲間がいる！お前には負けない！！いくぞ皆！！！」

ライダー軍団「オー！！！！！！」

聖夜「俺もかだぜ・・・・」

ライダー軍団「うおおおお！！！！」

怪人軍団「あぎゃぎゃぎゃぎゃ！！！！！」

聖夜「・・・・ライダー大戦かだぜ」

～狂音瞬の初夢～

瞬「なンなンだよォォォォォォォォ！！！！！」

ウヴァ「うまいなお汁粉！！！」

ガメル「おれ、おかわり！！！」

メズール「そんなに早く食べるとのどにつまるわよ、ガメル」

カザリ「猫舌にはつらい・・・」

ギル「　　」↑ドリルの跡と斬撃の跡

バース（５１０３）「何しようとしてる！！！」

イクサ（７５３）「その命、神に返しなさい！！！」

瞬「むしろお前の命を返せぇぇ！！！」

イクサ「うぎゃあああああ！！！！！」

瞬「悪夢だ・・・」

～蛇川乱太の初夢～

蛇川「富士山の上を鷹が飛んでいて、目の前にはマーボー茄子・・・・」

蛇川「普通ですね・・・」

～慈円炎忌の初夢～

炎忌「我に不可能などない！！！！」

ギルガメッシュ「いや、我こそ不可能はない！！！」

イスカンダル「お主ら、わしの臣下になる気はないか！！」

炎忌「我はならんがギルガメッシュはなる！！！」

ギルガメッシュ「我はならんが炎忌はなる！！」

セイバー「貴方達は何がしたいのですか！？」←第五次聖杯戦争のセイバー。ちなみにお雑煮１０杯目

士郎「セイバァァァァァァ！！！！俺の飯ィィィィィィ！！！！」

炎忌「勝負だ英雄王！！！！！」

ギルガメッシュ「我の前にひれ伏せ殺戮王！！」

イスカンダル「よし、こうなれば力づくだな！！！」

ウェイバー君「ライダーやめろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

炎忌「・・・・」

～鹿目まどかの初夢～

キュゥべえ「僕と契約して魔法少女になってよ！！」

まどか「何で夢にまで！！！」

オクタヴィア「ガァァァァァァァ！！！！！（訳：恭介ェェェェェェェ！！！！！）」

マミ「　　」←マミられ中

杏子「マミィィィィィィィィ！！！！！！！」

まどか「何だ夢か・・・・」

～作者の場合～

霊宮「ゐぎゃあああああああああああああ！！！！！」

出番がなかった魔法少女ｓ「デバンよこせぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

霊宮「散々だ」

新年番外編！～みんなの初夢～（後書き）

後書

楓夏「お兄ちゃん！！！」

空也「ナズェオマエがここに居る！！」

霊宮「最初オンドゥルだな」

ほむら「速く並びなさい貴方達」

ガヤゾロ・・・

霊宮「では！！！」

空也「新年あけましておめでとうございます！！」

聖夜「今年も！！」

炎忌「全力全開！！」

蛇川「オンドゥルララギッタンディスカー！！」

瞬「のノリでいくので！」

まどほむ「よろしくお願いします！！！！」

全員「では、次回の更新をお楽しみに！」

FORTH　DAYS7

「んで・・・どうする？」

「そうね・・・逃げながら帝竜を討伐する、というのはどうかしら？」

空也とほむらは、ゼウス軍が聖夜に殺戮されたことも知らずにこの後の作戦を練っていた。

「ここの帝竜は死者を操るからな・・・物量戦じゃ勝てないぜ」

「大規模殲滅兵器で倒せばいいじゃない」

「あ、その手があったか。もう世界滅んだしいっか」

空也は家族が生き残っている可能性は０に等しいと考えていた。親に関してはすぐにそう考えたが、妹の事は諦めきれずに移動中に探してみたりした。しかし、見つからなかった。そのこともあってか空也は生き残りに関してはもう諦めていた

「そうときまれば行こうぜ。楽しい楽しいｐａｒｔｙｔｉｍｅだ」

「そんなに乗り気になれないわ・・・・」

空也とほむらはそこから歩き去っていく。それを物陰から見つめる、影があったことに気づかず。

「・・・・・発見・・・・・」

影はそういうと空也とほむらを気づかれずに追いかける。見つからずにそのまま行くと、空也とほむらが帝竜と対峙しているところだった

「やっぱり物量戦ですかそうですか」

「じゃあグレネード使って吹き飛ばすからあたらないようにしなさい」

「んな横暴」

言うが早いがほむらはグレネードを発射し、空也はほむらの手をひっつかむ。そしてほむらの時間停止で空中に逃げると、時間停止を解いた。

「・・・・あと少し・・・・」

影はそうつぶやくと、腕輪を二丁拳銃へと形を変えた。一方、空也とほむらは爆風によりさらに空中へ打ち上げられ、その勢いで帝竜を殺そうとしていたが、帝竜は人間を操って人間の壁を作り出してふせいだ。

「・・・・ｓｔａｎｄｂｙｌａｄｙ?・・・・ｇｏ」

影はそういうと人の壁を空也たちに当たる前に二丁拳銃から放たれた弾丸で吹き飛ばす。

「生き残り?」

「そうみたいね」

空也が少年・・・神白漸に近づくと、漸は帝竜を指差した

「・・・・kill・・・・」

「殺せってことか？」

「・・・・yes・・・」

その言葉を聞くと同時に空也は走り出し、帝竜をすれ違いざまに切り裂く。その傷にほむらと漸が銃弾を撃ち込む。

「・・・・白狼の弓機（はくろうのきゅうき）ーウルフィリアスー・・・・・」

漸が武器を弓へ変えると、傷口へ矢を撃ち込み、再生力でふさがれないようにつきさした。

「空也、決めなさい」

「ああ・・・・・」

ほむらが様々な重火器で帝竜を足止めしている隙に、空也が傷口へと走る

「・・・・白狼の双剣器ーウルフィリアスー・・・・・」

漸も傷口へと走り出す、空也がつく少し前に砲撃を止め、ほむらは離脱していた。

「大門オロシ！横薙ぎ版！」

「ｄｏｕｂｌｅ　ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ」

空也が横に深く切り裂き、漸が雷を纏った双剣で切り裂き、帝竜を絶命させた。

「・・・・・希望・・・・・・」

「なんか言ったか・・・ってあの白髪野郎、いなくなったな」

「ええ・・・とりあえず、一件落着、かしら？」

空也とほむらはそういって、歩き去って行った。

「ニアラ様・・・彼らは４番目の帝竜を倒したようです」

ｅｘｔｒａ　朝霧楓夏と神白漸（前書き）

時間軸について

空也本編終了→楓夏本編です

つまり空也は生きています。ほむほむも！

extra　朝霧楓夏と神白漸

「ここはどこなんだろう？分からないんだよ」

白い軍服の様な服装に身を包み、腰までとどくかとどかないかの銀髪、赤い瞳を持つ少女がいた。姿だけみてみれば、可愛いの一言で済むが、背中に目を引くものがあった。

「この日本刀、とてもなじむんだよ」

背中に背負っている日本刀である。血のように赤い鞘を持つ日本刀・・・血桜を背負っていた。楓夏はあたりを見回すと、ぼそり、と呟いた

「ここって本当に日本かなあ？空には月が二つあるし・・・まあ、明日探せばいいんだよ」

そう言うと適当な壁に背中を預けると、たったまま寝始めた。すぐにねいったようなので、相当疲れがたまっていたみたいだ

～物語充填中～

「・・・ミッドチルダ、久しぶり・・・」

空也達を助けた少年・・・神白漸はそういうと腕輪状態のウルフィリアスを一瞥すると、つけている方の腕を高く上げる

「・・・白狼（はくろう）の翼器（よくき）ーウルフィリアスー・・・」

そう言うと腕輪が消え、漸の背中には白い翼が生えていた。それをはためかせながら漸は飛び立った。そして、教会・・・聖王教会のてっぺんへとたつと、静かに見回す。そして、飛び去って行った。それを見ている影がいることに気づかず・・・

～物語充填中～

「ふああ・・・朝なんだよ・・・・」

楓夏はそう言いながら、目をこすり、辺りを見回すと、空也と同じくらいチートを発揮しビルからビルへと跳び移った。脳裏に移るのは優しかった兄の面影

「（お兄ちゃん大丈夫かな・・・聖夜さんに聞いた限りでは強くなったみたいなんだよ・・・）」

親と絶縁状態に近かった空也が家族の中で、唯一優しく接したのが楓夏であった。

「まあ、大丈夫かも」

そう言うと、聖王教会の頂上へ立っていた。

「う～ん・・・・昨日殺した人たちが質量兵器質量兵器うるさかったけれど・・・日本刀のことかなあ？自衛のためにも必要かも」

楓夏はそう言うとそこからさらに飛び降りていった。まずは情報収集をしたいらしい。楓夏は日本刀を手近にあったアコースティックギターのケースを見つけ、日本刀を入れた。大きさで言えば普通の

ギターケースを５０?ほど大きくした感じで、ギリギリ日本刀が入る大きさだったが、

「うう・・・大きいんだよ」

少しあくせくしていた。楓夏は図書館みたいなところへと行くと、いたるところから本をひっつかみ、読み始めた。ミッドチルダ文字を何故読めるのかというと、楓夏自身でも分からないが頭に入ってくるためだ

「（次元世界・・・管理局・・・質量兵器禁止・・・うわあ、私の世界の定義ほとんど捻じ曲げちゃうんだよ）」

楓夏はあらかた本を読み終わると、次はここ最近のニュースを探り始めた。

「（機動六課・・・・地球!?あ、別の世界か・・・でもＪＳ事件って・・・）」

楓夏はすべてのことについて調べ始め、１０日間ほど入り浸っていた。そして、この世界のことについてあらかた把握していた。

「とりあえずおとなしくなんだよ。日本刀がみつかったｒ「見つけたぞ!」来ちゃったんだよ!?」

楓夏は管理局員を見るや否や、ギターケースから日本刀を引っ張り出して走りながら背中に背負った。そして、メタイが自身のキャラのもととなった大食いシスターの保護者のツンツン頭の高校生の口調を言った

「不幸なんだよ～～～！！！！」

「・・・・ちょっと黙って・・・・」

「ごめんなさいなんだよ・・・・ってエエ！？」

楓夏の隣には、背中から翼を生やしている少年が、自分の速度に合わせて飛んでいる・・・そんな姿だった。

「バル○○ク！？」

「・・・違う・・・とりあえず・・・・」

そう言うと少年・・・漸は楓夏をお姫様だっこし、空へと飛び去った

～物語充填中～

「ありがとうなんだよ・・・私は朝霧楓夏？貴方は？？」

「・・・神白漸・・よろしく・・・・」

これが朝霧楓夏と、神白漸の邂逅であった

ｅｘｔｒａ　朝霧楓夏と神白漸（後書き）

朝霧楓夏
年齢：１５歳
魔力：なし
容姿・服装：ラウラの左目を右目と同じようにして、服をそのままにした感じ。背は本家ラウラより高い。

武器：血桜
赤い刀身を持ち、赤い鞘を持つ日本刀。稲光並みに強い

神白漸
年齢：１５歳
魔力：ＥＸ
容姿・服装：鏡音レンの髪と瞳を白色にした感じ。服は半ズボンに灰色のＴシャツ、パーカーをきている（下着？きてるに決まってんだろ！）

武器：白狼ーウルフィリアスー
第一級指定のロストロギア。危険度は魔力であらわすとＥＸ以上。さまざまな武器、道具に変化する。自分で使い手を選ぶらしい。

FORTH END extra start（前書き）

ここから帝竜戦より分岐しｅｘｔｒａ編えと行っちゃいます！

FORTH END extra start

「どうやって次の国行くか？」

「無理ね・・・」

バチカン市国の帝竜を倒した二人ははっきり言って次の国へ行けないという危機へと陥っていた。

「あの自由にどこでも行ける方法があればな～」

「・・・・・」

「ほむほむどしたの？」

ガチャリ

無言で銃を突き付けられ、ホールドアップする空也、突き付けるほむら。何ともシュールである。しかし、馬鹿な二人の足元に変な穴が開いた。

「オゥノー！！？？？」

「何よこれェェェ！！！！」

奇声を上げる空也と女の子っぽい悲鳴を上げて落ちるほむら。

～物語充填中～

「どうしたの、漸??」

「・・・君のお兄ちゃん・・・来る・・・・」

「!!」

楓夏が驚くと、漸は上空を見上げる。そこから、空也とほむらが落ちてきた

「何故楓夏がここにぃぃぃぃ!!!!!」

「速くおろしてェェェ!!!!」

だがフェミニスト空也はほむらをお姫様だっこしてきちんと着地していた。さすがフェミニスト、やることなすことすべてりあZYぎゅあああああああ!!!!!!

ふざけ過ぎましたｂｙ作者

「何で楓夏がいるんだよ・・・・」

「ナンデオニイチャンハソノヒトヲオヒメサマダッコシテルノ?」

ヤンデレ化する楓夏・・・それに多少たじろぐ空也だが、気絶したほむらをその場に寝かせる。落ちた場所は・・・・楓夏が登場したときに立ち寝したビルの屋上に寝かせていた。とりあえず空也は漸に軽く頭を下げる

「なんかもうほんとスマン」

「・・・別にいい・・・それに、この世界じゃ一蓮托生・・・・」

「そうなんだよお兄ちゃん、この世界には管理局っていう組織がいてね・・・・

というわけなんだよ」

「おいおい・・・裏じゃやばいことやっているんだな・・・人体実験・・・人間をモルモット扱いかよ！」

「・・・・管理局をつぶす・・・・」

「考えていたところだ」

楓夏からの説明を受けた空也は、怒りを覚えると同時に実質漸の提案に乗る。そんな二人を見ている楓夏は自分もつぶすことにしたらしい、眼に一瞬、狂気の色が映る

「・・・・話は聞いたわ」

「「「！！！！」」」

「要は上をつぶせばいいのでしょう？なら話は早いわ」

ほむら曰く、どんな組織でも上をつぶせば全てがぶち壊れる。魔女との戦闘経験から言っているのだろうが、管理局みたいな組織は上層部全てを殺し、なおかつミッドチルダに管理局の非道な行為をさらけ出さないといけないため、相当無理な話だ

「・・・・・行動開始・・・・空也は管理局内部へ潜入・・多分リンカーコアはあるから、このデバイスを使って・・・・」

「ん？」

漸が渡した者、それは時計型のインテリジェントデバイスであった。

「・・・それを使えばいい・・・・」

『マスター、これからよろしくお願いします』

「ああ」

空也はそういうとその場からジャンプして消えた。

「・・・・ほむらと楓夏は俺と管理局の支部をつぶしに行く・・・・」

「ええ、分かったわ」

「腕が鳴るんだよ！」

そうして3人も消えた・・・しかし、4人は知らない、機動六課には、史上最強の《テンセイシャ》がいるのだから・・・・

FORTH END extra start（後書き）

extraは相当長くなりそうです

extra one rainbowgirl

「ふむ・・・」

空也は管理局に入りこむと一ヶ月間、管理局の情報を調べてはコピーして、調べてはコピーして・・・を繰り返していた。管理局の制服を着ている空也はなんというか・・・その・・・サマだ。

「窮屈だなぁ・・この制服」

そう言うと空也は服をいつも通りの服に着替える。そして稲光を腰にかけると、データを入れたUSBをポケットに突っ込むと、その場から静かに立ち去る・・・はずだったが、

「・・・・手前が、火流裁(かりゅうさい)か 」

「貴殿が、朝霧空也でござるか・・・斬らせて貰う」

火流　裁がそう言うと、空也は鞘に納刀したまま軽く稲光を一閃すると、煙が巻き起こり、空也はその隙に逃げていた。裁はそれを見送りながら

「逃げられたでござるか・・・・やはり、拙者の言い方がまずかったでござるか」

裁はそういうと、逆刃刀を納刀し、その場を去って行った

〜物語充填中〜

「面白そう何だぜ」

「聖夜さん、あの人たちが下手したら死んじゃいますよ！」

聖夜の言葉に着物をきた少女が反応する。

「色音、気にすることはないんだぜ・・・あいつらは生き残る、必ず何だぜ」

今日はポジティブなんだな、と聖夜は小声で言うと、そこから消えた。残された色音は、一人空也を見つめながら、こうつぶやいた。

「大丈夫でしょうか・・・空也さん」

色音はそういうと、妖刀を構えて、居合の構えをする

「はあああ・・・・・ハァ！」

そして空間を切り裂くと、裂け目から空也がいるミッドチルダへと走って行った。日付が変わらぬうちに。

～物語充填中～

「・・・・終了・・・・・」

「酷いわね・・・」

「酷すぎなんだよ！？」

漸が日本刀形態から腕輪形態へとウルフィリアスを変えると、楓夏へ一瞬眼を向けた。そして、その場からデータをコピーしたＵＳＢメモリをポケットにしまうと一足先にその場から抜け出した。その次にほむらが出ていき、最後に楓夏が軽く黙祷し、その場から消えた。

～ｓａｖｅ？～

～≫ＹＥＳ　ＮＯ～

～ｄａｔａ　ｓａｖｅ・・・・～

～ｓａｖｅ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ～

extra one rainbowgirl（後書き）

虹原色音は、DEADPOOL ZERO AQUA様から頂いたものです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0400z/

７ＴＨ ＤＲＡＧＯＮ ２０２０　ＡＮＯＴＨＥＲ ＤＡＹＳ

2012年1月14日18時53分発行